

令和7年度学校評価表

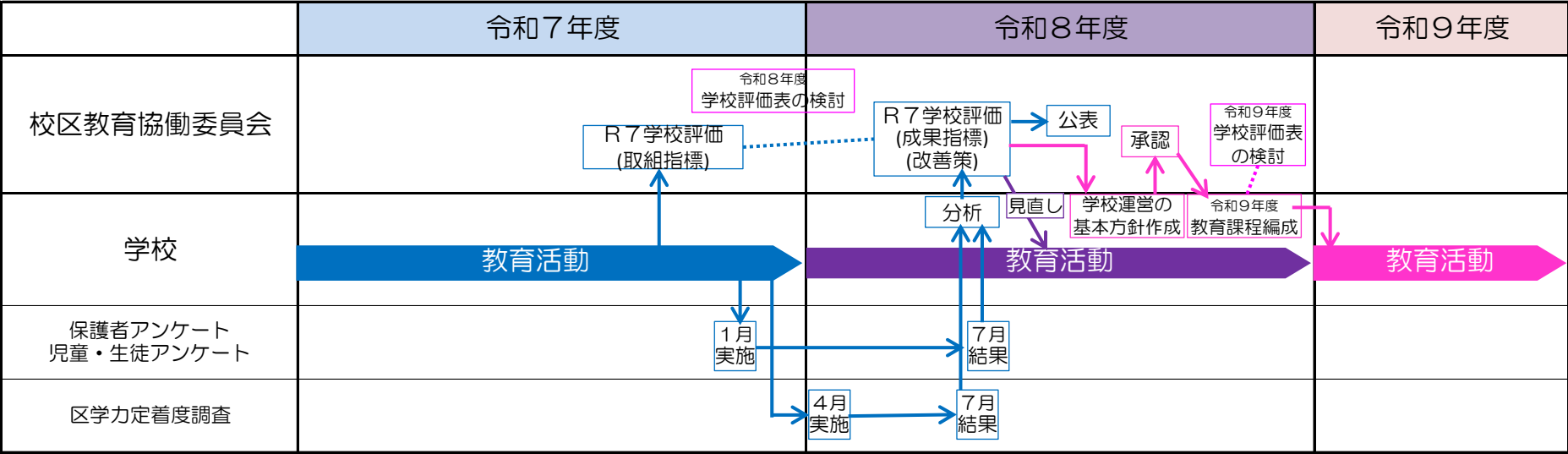
品川区立第二延山小学校 校長 伊藤 健治
第二延山小学校校区教育協働委員会 委員長 井上 健

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和7年度の学校評価が令和8年度および令和9年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和7年度 学校評価 品川区立第二延山小学校

評価項目1 学力に関すること

重点目標		○学習規律の確立と質の高い授業の実施により、確かな学力の定着と生涯学び続けようとする自学共生の確立を目指す。 学力調査等の分析結果と課題解決の方策の関連を考察し、より具体的な改善方策を実践する。 ○ユニバーサルデザインの視点を取り入れながら、誰も取り残さない、質の高い授業の実現を図る。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	区学力定着度調査(4月実施)において全教科で平均値を上回る。	区学力定着度調査の結果、ほとんどの教科で平均値を上回っていたが、一部の学年において未達成の教科があった。	B	・基礎学力が定着していない児童が一定数いた。チャレンジ月間では、引き続き取り組むべき課題を出しながら、家庭との連携して、定着につなげていく取り組みを継続する。 ・今後も、各教員がねらいと評価を意識した授業づくりを意識していく。 ・各教員が、その授業で何を学ばせ、どのような力を伸ばすのかを意識した授業づくりを行う。 ・授業の終末でのまとめの時間を確実に確保し、児童が自己評価と振り返りを確実にできるようにしていく。 ・個別指導の必要な児童が基礎・基本を身に付けていけるよう、様々な人材と連携した細やかな指導を行っていく。
	全ての授業において、ねらいと評価が一体化した授業を展開する。	全てとは言いきれないが、ねらい・学習課題・学習問題の在り方等検討し、意識して取り組むことができた。	B	
	授業の終末に児童の自己評価や振り返りを必ず行い、理解状況を把握する。	児童の自己評価や振り返りは、現状十分に確保できていない授業もあった。	B	
	学力調査等の結果分析により明らかになった課題の明確化を行い、解決を図るための取組重点を決めて実施する。	分析により明確になった課題を意識して授業の取り組むことができた。学年全体で課題解決に向けて足並みを揃えて進むことができた。	A	
	個別指導が必要な児童には、基礎・基本を工夫し、指導助手や未来塾講師と連携しながら指導内容を充実させる。	チャレンジ月間の取り組みによって、普段塾や家庭学習をしていない児童が自分なりの課題に取り組むようになってきた。未来塾や復習教室なども生かしつつ、個別指導が必要な児童の支援ができた。	A	
②	授業技術の共有や授業力向上を実現するために、校内研究会において全教員が授業実践を行う。	今年度は、校内研究において全教員が年間2回授業を行うことで、授業力の向上に務めることができた。	A	・発問だけでなく、「何に取り組む、どんなゴールを目指すのか児童自身が分かるめあて」を設定した授業づくりをしていく。 ・今年度から研究授業を一人年1回という形にしたことにより、互いに授業を参観する時間が増え、それぞれの指導に生かすことができるようになった。新しい指導方法を取り入れながら、校内で教員同士が学び合える場を一層作っていく。
	各教員が自己の授業を振り返ったり、他教諭と授業を見合ったりする機会を計画的に確保する。	校内研究や通常の授業観察等で、各教員が自身の授業を振り返る機会を年間約5回確保した。管理職に限らず、多くの教員とお互いの授業を見合うことができた。	A	
	誰もが安心して学べる授業にするために端的で分かりやすい説明・指示・発問を吟味して学習計画を立てる。	今年の校内研究では、発問に焦点を当てた。1年を通し、発問を吟味して学習計画を立てることができた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		○市民科学習を中心とした学習や行事への取組等を通して、児童が相互に関わり合い、認め合うことができるよう、児童が自分や他者の価値を理解し、豊かな人間関係やウェルビーイング実現への素地を築く。 ○市民科学習や学校行事を通して市民科のねらいが達成できるよう、単元の計画及び実践を行う。(一貫プラン) ○児童の優しさや望ましい人間関係の構築及び高学年のリーダーシップを育む中心的取組として年間を通したなかよし班活動を計画的に実施し、精神的な強さとレジリエンスを涵養する。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	「社会に主体的に関わり自らの生き方を確立しようとする児童」の育成を目指し、発達段階に応じた市民科学習を実践する。	学年の発達段階に応じて、市民科授業地区公開講座、キャリア教育、環境学習などを実施して、社会との関りに関する学習を行うことができた。達成状況を明確にする指標を示して、授業に生かすことも必要であった。	B	・市民科授業地区公開講座については、保護者と教員との教育課題共有の有効な場面とすることができた。さらに多くの保護者が参加しやすいように、時間や開催方法を工夫した設定で実施する。 ・家庭と連携した学習を計画的に実施していく。
	主体的に考えて意見を出し合うような場면을指導計画の中に位置付け、ねらいを明確にした市民科の授業を実践する。	児童同士で意見を交流する機会を設けて、ねらいも明確に示した。市民科の授業を実践できた。今後、保護者の意見も取り入れた授業を実践できるとさらに良い。	A	
②	学校行事を通して、協調性や主体性、積極性を育む。	運動会、展覧会、二延プレゼンウィークなどを実施する中で、学年の発達に応じた自分の役割を果たそうとする姿が見られた。感想や交流も積極的に行っていた。	A	
	年間を通して柱とするテーマを立て、関係教科・市民科を効果的に配置しながら指導を実施する。(カリキュラムマネジメント)	地区公開講座などの行事関係のものはテーマを明確にして出来た。関係教科を効果的に配置した指導を実施できたが、一部であるため、教科横断を更に広げる必要がある。	A	・引き続き、児童の実態を捉えながら、市民科一貫プランに基づいた授業を各学年で確実に実践していく。 ・家庭との連携を取りながら、学校と家庭が統一した指導を日常的に続けていくことが必要であった。学習を通して、学校生活や家庭生活の中での学んだことを意識化していけるように、指導内容を工夫していく。
	ねらいを明確にして、学習内容に対して目的意識をもって取り組ませる。	ねらいを明確にして、学習内容に目的意識をもたせて取り組むことができた。定着させていくために、普段の生活でも指導をして、意識を継続させる必要がある。	A	
③	1年間のなかよし班活動について、90%以上の児童が満足感を得る。(3学期の振り返りで確認)	6年生は最高学年として責任感をもって活動ができ、5年生も来年度に向けて、役割を意識することができた。それに伴い、皆が班の一員として行動できたことに満足感が高まり、下級生は理想のリーダー像をもつことができた。	A	・6年生が下学年をまとめようとする意識が高まり、6年生のリーダーシップが育った。それを見ている下級生は理想のリーダー像をもつという良い伝統ができていく。大きな行事だけでなく、日常的になかよし班活動を機能させる。 ・教師が教える場面を少なくし、児童同士の学びだからこそ得られる活動で重視する。教師は指導する内容を理解した上で、活動をサポートしていく。
	日常的な活動(清掃・班遊び等)における課題を丁寧に扱い、リーダーを中心に解決できるように導く。	教員がなかよし班清掃などで班の状況を見ながら助言を行い、課題の解決に導いた。児童自ら課題意識をもたせることも大切であるため、自分達で気付けるように促す必要がある。	B	
	各なかよし班のグループで目標と成果や課題を明らかにし、児童が把握した上で行動できるようにする。	学期ごとになかよし班の目標をしっかりと設定し、共有することができた。また、その振り返りや成果を自分の言葉で発表できた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和7年度 学校評価 品川区立第二延山小学校

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		○自分のめあてをもち、自ら運動に取り組もうとする子どもを育てる。 ○昨年度の体力調査結果を踏まえ、学校として本校児童の体力・健康上の課題を解決できるように、休み時間も含めた取組を工夫する。 ○姿勢の保持を切り口として、食事・運動・睡眠等児童の基本的生活習慣の維持・向上を働きかけるような取組を工夫する。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	「運動がすき」という質問において肯定的な回答をした児童が85%を上回る。	全学年で達成した。6年生以外は90%となり、十分に達成できた。	A	・単元の見通しをもたせ、学習のゴールを明確にさせる。 ・授業で児童個人のめあてをもたせる時間を設ける。 ・学年に応じためあての立て方を提示し、課題を見付ける力を養う。 ・児童個人のめあてが達成できる場を設定して指導する。 ・体力アップ週間の際、学年に応じた具体的な目標を児童に提示する。
	体育の授業で、児童がめあてをもって取り組もうとすることができるようにする。	各学年めあてをもち、それに対する振り返りを行えた。今後は各児童の自らのめあてをもてるようにさらなる指導が必要である。	A	
	体育の授業や体力アップ週間、スポーツライアルなどの取り組みの中で個人のめあてをもたせ、達成感をもてるようにする。	授業の中では達成できていたが、体力アップ週間等ではめあてをもたせる取り組みが不十分であった。	B	
②	季節に関わりなく、多くの児童が(健康管理の上で)自らすすんで外遊びができるようにする。	運動委員会の取り組み時には多くの児童が外遊びをできたが、それ以外については、その児童ごとでの現状を維持した状況であった。	B	・運動することの良さを伝え、外遊び、中遊びを推奨し、児童に声を掛ける。 ・休み時間は、外遊び以外の個人の好きなことに取り組むことが大切にされる時間でもあるため、二極化の傾向も見られた。今後、それぞれの層に沿った声掛けを工夫していく。 ・今後は実態に合った目標を設定し、児童の体力向上を図っていく。
	各学年で、週に一度は外遊びを推奨する声掛けや取組などを呼び掛ける。	各学年の半数以上は遊べていたが、さらなる声掛けが必要であった。	B	
	ワンミニッツエクササイズなどに日常的に取り組むなど、生活の中に運動を積極的に取り入れるような環境を作る。	授業等で取り入れたが、日常的に継続するための取り組みは不十分であり、浸透させることが難しかった。さらに習慣化させる取り組みが必要である。	C	
③	授業中の姿勢保持を多くの児童が実践できるようにする。(立腰教育の推進)	声を掛ければでき、意識できる時間帯はあるが、継続させることが難しかった。	B	・授業の初め、終わりの挨拶等、姿勢を正す場面を設けて声を掛け、意識付けをさせる。 ・今後も継続的に姿勢体操に取り組む。 ・保護者会などを使い、家庭へも声掛けの協力をお願いする。
	日常的な啓発指導や保健担当を中心に、姿勢を重点とした週間を設定するなど、全校で一致して取り組む。	定期的に姿勢体操に取り組んだ。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		○「いじめはいつでも誰でも起きる、起こす可能性がある」という認識の下、小さなトラブルも放置せず、組織的な対応を行う。 ○把握したケースは対応を組織的に検討するとともに経過を全体で把握し見逃さない学校体制を構築する。 ○児童自身がいじめは絶対に許されないことであるという認識をもつように、予防教育や自治的活動にも重点を置いて指導する。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	いじめ(含人間関係のもつれ)や不登校の案件について、全件全校で共有し、学校として組織的に対応する。	いじめと認知した案件については、生活指導記録や区のいじめ報告に確実に記入し、全校で共有できている。軽微な案件については学年で対応している。	A	・様々な案件について共有し、学年で迅速かつ確実に対応できている。ただし児童の課題や保護者のニーズも多様化しているため、いじめの問題が複雑化している。 ・より一層研鑽を重ねて防止に向けた対応ができるようにする。そのために、各種調査ツールの活用を徹底し、学校いじめ防止基本方針に則った対応をする。
	・「学校いじめ防止対策基本方針」に沿った指導や組織的な対応をする。デイケンによる健康観察、NiCoLiによるメンタルヘルス、いじめDアンケートを確実に行う。	デイケン、NiCoLi、いじめDアンケートについては全クラス確実に実施できている。学校いじめ防止対策基本方針は、より一層職員で理解して、いじめ防止に努める必要がある。	B	
②	児童が自分はいじめられたと感じる状況について、全てのケースにおいて一定期間内に解決させる。(早期解決の徹底)	全てのケースにおいて、学年団を中心に3か月確実に見守りをし、早期解決することができた。重大事態等、大きなトラブルもなく1年間を過ごすことができた。	A	・トリプルチェンジ等のいじめ防止授業で、いじめは許されないことであり、どんなことがいじめかもしっかりと理解できている。一方で、自分がしたことを客観的に見たり、自分もがされたから仕返ししていいなど、まだまだ間違った考えをもっている児童がいる。 ・さらに意識を変えられるように、より一層日々の授業や生活でいじめ予防の学校風土を高めていく。
	小さなものも含め把握したトラブルについては、すべて学年団で共有し、管理職を交えて組織的な解決を目指す。	学年主任を中心に情報共有し、複数の目で対応できている。必要なときは、管理職とも情報共有し、対応を協議して組織的な対応ができている。	A	
	周りの児童が状況を把握し、自分たちがとるべき正しい行動について理解し実践できるようにする。	いじめ防止授業を通して、いじめはダメだという認識や、どんなことがいじめかの理解はできてきている。一方で、その場の雰囲気や友達関係等で正しい行動ができない児童がいる。	B	
③	児童のよりよい人間関係をつくる指導や取組を実践する。	表面的なよい関係は築けている。一方で、お互いの違いを認め合ったり、相手の意志や立場を尊重するような心情をより育てていく必要がある。	B	・情報の共有や組織的な対応はよくできているため、引き続き継続していく。他者への理解や多様性への共感を高めていくために、市民科の授業等を活用して日々指導していく。 ・縦割り班活動などにおいて、より一層計画的に指導を継続し、児童の良好な関係を築いていく。より良い教材については学校全体で共有し、財産としていく。
	未然防止のために、市民科授業においていじめに関する指導実践をすすめるとともに、自治的活動の中でもいじめ根絶の意識を高める内容を取り入れる。	市民科の授業でトリプルチェンジをはじめ、区からの導入された教材を確実に活用し、いじめの未然防止の土台を学校全体で築くことができた。	A	
	いじめ・不登校対策委員会を毎月、生活指導夕会を毎週開き、経過を全体で共有する。SCIにつなげたり、ケース会議を開いたりして、対応を検討し実行する。	いじめ・不登校対策委員会、生活指導夕会は計画通り確実に実施できた。必要な場合は、コーディネーターや管理職と協力して、外部機関ともつなげることができた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 (特色ある教育活動に関すること)

重点目標		○個の特性に応じた特別支援教育の充実を図る。 ○コミュニティスクールとして、地域や地域関係機関との連携による教育活動の充実を図る。 ○デフリンピックや聴覚障害に関する基本的な知識を学ぶ。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	児童の発達特性等を理解し、個に応じた指導を行うことにより、全ての児童の安心・安全を確保する。	連携した見守りや指導により、十分に達成することができている。	A	・訪問指導教員と連携し、情報共有しつつ個別指導を行うことができた。児童と関わる支援員やスクールカウンセラーと学級担任が定期の相談時間を取れないことが課題だが、連絡の仕方を工夫した。 ・スクールソーシャルワーカーとの連携により保護者との関係を強化していく
	特別支援教室の拠点校であることを生かし、学級担任と訪問指導教員の連携を密にすることで、一人一人の児童に応じた指導を行う。	訪問指導教員とは密に連携し、情報共有をしつつ個別指導を行うことができています。支援員が複数に増えたことにより、教員への報告・連絡を行う機会を確保することが新たな課題となりつつある。	A	
②	地域関係機関等との連携により、教育内容を充実させ、学習への関心を高めたり、地域への愛着を深めたりする。	連携による学習への関心の高まりや、地域への愛着が表れた学習成果の発表の様子が見られ、十分に達成できている。	A	・地域の方々が愛情をもって関わり続けてくださっている。地域関係機関等と連携した教育内容は多岐にわたり、内容回数ともに充実している。学校地域コーディネーターから、地域の方とつながり、連携のお陰で大変充実した内容となっている。 ・授業余剰時数が少なく、時数確保が難しい現状がある。必要に応じて内容の精査を検討しつつ、充実したプログラムを継続できるようにする。
	実施方法や時期を工夫しながら、昭和医科大学と連携を密にし、実施可能な取組を実現させていく。	いのちの授業、夏の復習教室、5年生の連携授業を通して、昭和医科大学との関係を深めている。	A	
	学校地域コーディネーターとともに、地域の人材を活用した取組を深化させる。	町探検、地域未来塾、茶道体験、茶道部といった学習や行事で、地域コーディネーターを中心に地域と密接に連携した活動を行っている。	A	
③	異なる言語やコミュニケーションの形を理解できるようにする。	低学年で手話を学ぶ機会を計画的に設け、実際に言語やコミュニケーションの形を体験して学ぶことができた。	A	・2年生では手話歌の簡単な手話の学習を継続している。1～6年生の英語のジョイントストーリーテリングでも手話をうい学んでいる。 ・今後さらに、以上の学習が手話でのコミュニケーションとしての学びであることを児童や保護者に積極的に周知し啓発する。
	デフコミュニケーションである、手話について学ぶ機会を設ける。基本的な手話の単語やフレーズを学ぶ。	2年生で手話歌を歌い、簡単な手話の単語について学習した。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成